ホロコーストとルーマニア(前篇)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 野村, 真理 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/44890

ホロコーストとルーマニア（前篇）

野　村　真　理

目　　次

Ⅰ　はじめに
Ⅱ　ルーマニアの国境変更とユダヤ人
⑴　大ルーマニアの誕生
⑵　ルーマニアのユダヤ人
Ⅲ　ルーマニア人のルーマニア
⑴　アントネスク政権の成立
⑵　ヤシのポグロム
Ⅳ　民族浄化政策の始動
⑴　ミュンヘン作戦
（以上，本号掲載）
⑵　ユダヤ人追放の開始と中断
Ⅴ　ガス室なきホロコースト
⑴　トランスニストリアの無惨
⑵　ポーランドか，パレスティナか
Ⅵ　ルーマニアにホロコーストはなかった？
⑴　アントネスク政権崩壊
⑵　ルーマニアのホロコースト認識の問題点

Ⅰ　はじめに

1942年はじめ，ナチ・ドイツは，領域的には全盛期を迎える。モスクワ攻略失敗により，対ソ戦の電撃的勝利という目標に狂いが生じてはいたが，スペイン，ポルトガル，スイス，スウェーデンといったわずかな中立国を除き，ドイツはヨーロッパ大陸のほぼ全域を勢力圏におさめた。同時に，ホロコー

ストは最終局面に突入する。1941年６月の独ソ戦開戦後，新占領地でユダヤ人の大量射殺が執行されたのに続き，1942年には，東部ならびに西部占領地から絶滅収容所への移送が本格化した。その結末が推定600万の犠牲者であった。

ドイツの勢力圏に組み込まれた国々において，ホロコーストとのかかわりは一様ではない。

ドイツの占領国で問題となるのは，個人の，あるいは特定の集団によるコラボレーションであろう。コラボレーションは，本来，対等な複数のパートナーによる協同／共同，協力等を意味する。しかし，第二次世界大戦以降のヨーロッパでコラボレーションという語は，敵や占領軍に対する協力，特にナチ・ドイツに対する協力という，きわめてネガティヴな意味をおわされることになった。「コラボ」は，ホロコースト加担者を含め，対独協力者に貼られるレッテルとなる。

では，国家としてコラボ関係にあったドイツ同盟国の場合，ホロコーストとのかかわりはどのようであっただろうか。

ヨーロッパのドイツ同盟国で，強度に大きな差こそあれ，ユダヤ人迫害がなかった国はない。ドイツのニュルンベルク法を模したユダヤ人種の定義が導入され，ユダヤ人に対し，市民権の剥奪や財産の没収，職場や学校からの追放等が行われた。第二次世界大戦への参戦後は，ユダヤ人は，兵役の代替措置として派遣労働大隊に投入されるか，労働キャンプに収容され，建設現場やさまざまな作業場で酷使された。いずれの場合も，重労働，虐待，劣悪な住環境，乏しい食糧に苦しめられ，多数が命を落とした。

しかし，ナチが一貫してドイツ勢力圏からのユダヤ人排除を唱え，最終的には絶滅収容所への移送によって排除を完成しようとしたのに対し，同盟国がナチ同様の排除の必然性にとらわれていたかといえば，そうではない。

イタリアでは，ムッソリーニが政権の座にあるあいだ，ユダヤ人の東部移送は行われなかった。移送が強行されるのは，1943年７月のムッソリーニ失脚後，ドイツ軍がイタリアに侵攻し，イタリア北部にドイツの傀儡国家，イタリア社会共和国を樹立した後である。イタリア社会共和国からユダヤ人のアウシュヴィッツへの移送は，ドイツから送り込まれた親衛隊将校，カール・ヴォルフとテオドール・ダンネッカーの指揮下で，1943年10月から44年１月末にかけ

て執行された。そのさい，イタリア人のファシスト民兵らがコラボとなった。

あるいはハンガリーは，1920年から国王不在のまま，貴族で軍人のホルティ・ミクローシュの摂政政が続いていたが，42年10月，ドイツがハンガリーにいるユダヤ人の絶滅収容所への移送を要求したのに対し，ホルティは拒否している。このときすでにホルティは枢軸国からの離脱を考えていた。これを察知したドイツ軍は1944年３月，ハンガリーに進軍，ホルティを王宮に軟禁してストーヤイ・デメの対独協力政府を樹立する。さらに10月には，極右の矢十字党のクーデタを後押ししてホルティを追放，同党のサーラシ・フェレンツを政権につけた。ユダヤ人のゲットーへの集中とアウシュヴィッツ等への移送，ハンガリー国内での虐殺が開始されるのは，ストーヤイ政権下の1944年４月以後である。1944年４月から45年１月はじめのソ連軍によるブダペスト解放まで，短期間のあいだに約50万人という厖大な数のホロコースト犠牲者を出したハンガリーでは，イタリアと異なり，中央ならびに地方の行政機構と警察がユダヤ人のアウシュヴィッツ移送に全面的にかかわった。しかし，それでもなお，第二次世界大戦末期のストーヤイ政権樹立と移送執行にいたる経緯を考えれば，ハンガリーがナチ・ドイツと同様，国家として，はじめから一貫して自国のユダヤ人の排除を追求したと言い切るのは困難だろう。

この点で，イタリアともハンガリーとも様相を異にするのがルーマニアである。1940年に成立したアントネスク政権はルーマニアの民族浄化を唱え，ドイツを除けばルーマニアは，みずからの手で「自国」のユダヤ人を大量に国外に追放し，死にいたらせたヨーロッパで唯一の国だった。イオン・アントネスク(以下，個人を問題にするときは，ミハイ・アントネスクと区別し，I・アントネスクと表記する)は，イタリア，ハンガリーがドイツの同盟国でありながら，ルーマニアに比べて反ユダヤ政策が手ぬるいことを繰り返し非難している。

しかし，ルーマニアのホロコーストと聞いて，首を傾げる人もいるかもしれない。現に，すでに十分な蓄積のあるホロコースト研究において，ルーマニアはそれほど着目されてはいない。その理由のひとつは，一見，上記とは矛盾して，ルーマニアの「自国」のユダヤ人が，数の上でほとんど無傷で生き残ったことによる。1942年夏，ドイツがルーマニアのユダヤ人の絶滅収容所

への移送を要請したのに対し，I･アントネスクがこれを拒否した結果である。

いったい，「自国」のユダヤ人を大量死させたルーマニアが，「自国」のユダヤ人口の保存者になったからくりとはいかなるものだったのか。本稿は，日本では研究が皆無に近いホロコーストとルーマニアのかかわりを明らかにしてゆく。

なお，本稿の地名表記について，第一次世界大戦後の大ルーマニア領域に含まれた地域の地名は原則的にルーマニア語称を使用し，適宜，ウクライナ語称，ロシア語称等を補ったが，完全に統一されてはいない。ブカレスト（ルーマニア語称ブクレシュティ），ベッサラビア（ルーマニア語称バサラビア）等，日本の学界で広く通用している地名は，それを採用した。また人名についても，日本の人名事典等で広く採用されている表記がある場合はそれに従い，必ずしもルーマニア語等の発音に忠実な表記にはなっていない。ルーマニア語による地名，人名の表記については，ルーマニア近現代史を専攻される高草木邦人氏のご教示をえた。御礼申し上げたい。

II　ルーマニアの国境変更とユダヤ人

⑴　大ルーマニアの誕生

14世紀はじめ，アナトリアにあらわれたオスマン帝国は，14世紀なかばにバルカン半島東端に手をかけ，そこから扇状に勢力を拡大して，17世紀なかばにヨーロッパ東南部全域を支配下におさめた。そのヨーロッパ東南部にあってモルドヴァ公国とワラキア公国は，オスマン帝国の直轄領となることを免れ，貢納金を納める自治国家として存続した。（**地図１参照**。）統一国家ルーマニアは，オスマン帝国の属国である二公国の議会が，1859年１月，ともにアレクサンドル・ヨアン・クザを公として選出したことにより，最初の一歩を踏み出す。クザは1862年，統一政府を組閣させ，合同議会を開催して両公国の最終的合同を宣言した。合同公国の首都はブカレストにおかれた。

クザの退位後，1866年５月，ホーエンツォレルン家のカールが公に選出され，カロル１世を名のる。オスマン帝国は，クザの合同公国に対して公一代かぎりの承認を与えたのに続き，カロル１世の即位後，両公国の統一を最終的に承認した。カロル１世のもと，1866年７月の憲法により，ルーマニアが

正式の国名となる。その後，1877/78年のロシア・トルコ戦争でのオスマン帝国敗北をへて，1878年，ビスマルクが主催したベルリン会議により，ルーマニアの独立が国際的に了承された。(**地図2参照**。)1877/78年のロシア・トルコ戦争は，ルーマニアではルーマニア独立戦争ともいわれる。

以上は，ルーマニア国家誕生にいたる，ごく教科書的な記述だが，レガート(王国)とよばれる1878年の独立ルーマニアの国土は，モルドヴァ公国，ワラキア公国の歴史的国土とも,両大戦間期ルーマニアの国土とも,現在のルーマニアの国土とも一致していない。わずらわしさを覚悟で，ユダヤ人にも関係するルーマニアの東部国境の変化を確認しておきたい。

まず14世紀なかばに成立したモルドヴァ公国の領土は，カルパティア山脈を西の境界として，東はドニエストル川(ルーマニア語称ニストル川)にまでおよび，ブコヴィナは18世紀にいたるまで公国の一部であった。いや，一部というより，モルドヴァ公国の名がブコヴィナを流れるモルドヴァ川に由来し，1565年にヤシに遷都するまで公国の首都がスチャヴァにおかれたことからもわかるように，モルドヴァ公国の中心は，もとは公国北部のブコヴィナにあった。ところが1768/74年のロシア・トルコ戦争中，ブコヴィナは69年末から74年までロシアに占領され，戦争がロシアの勝利に終わった後，ロシアにより，戦争中ロシアを援護したオーストリアに譲り渡される。モルドヴァ公国の抗議も空しく，1776年，オーストリアとモルドヴァ公国の宗主国オスマン帝国とのあいだで，ブコヴィナをオーストリア領とする新たな国境が合意された。結局，スチャヴァを含めブコヴィナのルーマニア人は，1878年の独立ルーマニアの国民とはなりえず，1918年にいたるまでオーストリアの少数民族の地位にあった。

同じく当時のロシアの南下政策が引き起こした1806/12年のロシア・トルコ戦争で，オスマン帝国敗北の犠牲となったのが，プルト川とドニエストル川に挟まれたモルドヴァ公国の東部領域である。1812年にロシアとオスマン帝国のあいだで交わされたブカレスト条約で，この地域はロシア領となり，かつてのワラキア公バサラブに因んでベッサラビアと命名された。ベッサラビアのルーマニア人もまた，1918年にいたるまで独立ルーマニアの外におかれる。

では，モルドヴァ公国の失地であるブコヴィナとベッサラビアは，いかな

る程度においてルーマニア人の土地といいうるだろうか。

オーストリアの人口調査によれば，1880年のブコヴィナの総人口は56万8453人で，そのうちウクライナ語（当時のオーストリアの統計では「ルテニア語」と分類される）使用者が23万9690人（42.16%）を占め，ルーマニア語使用者は19万0005人（33.43%）である。これにユダヤ人（統計上，正確にはユダヤ教徒の数）が６万7418人で続く。同じく1910年の調査によれば，総人口79万4929人のうち，ウクライナ語使用者が30万5101人（38.38%），ルーマニア語使用者が27万3254人（34.37%）で，ユダヤ人は10万2919人を占めていた[1)]。ウクライナ語使用者をウクライナ人，ルーマニア語使用者をルーマニア人とすれば，両者の人数が拮抗していることがわかるが，地理的には，ウクライナ人はシレト川の北部に，ルーマニア人は南部にわかれて集中していた。

ベッサラビアについては，ロシア領となった後，1817年に実施された人口調査によれば，総人口は48万2630人であった。しかし，その民族的構成は明かにされていない。これについてルーマニアの歴史家イオン・ニストルは，1923年に刊行された『ベッサラビアの歴史』（Ion I. Nistor, *Istoria Basarabiei,* Cernăuţi 1923）において，ルーマニア人が41万9240人で86%の多数を占め，ウクライナ人（ニストルは「ルテニア人」と記している）は6.5%程度であったと推定している[2)]。ニストルの推定の正否は史料的に判定困難だが，いずれにせよ，アレクサンドル１世の死後，ロシアはバルカンへの南下政策の拠点とするため，教育や言語政策，植民促進等によってベッサラビアのロシア化を推進した。1897年のロシアで実施されたはじめての本格的な人口調査によれば，ベッサラビアの総人口は193万6012人で，言語を基準とする民族別構成は，ルーマニア人47.6%，ウクライナ人19.6%，ユダヤ人11.8%，ロシア人8.0%という結果であった[3)]。

言語別構成がどこまで民族別構成を反映しうるか，さまざまな問題があるにせよ，これらの数字からブコヴィナもベッサラビアも，ルーマニア人が圧倒的多数者とはいいがたい地域であったことがわかる。ところが，同じく相当数のルーマニア人が住む旧トランシルヴァニア公国領[4)]ならびにその周辺地域まで含め，1878年の国境の外におかれたルーマニア人問題を一挙に解決したのが，第一次世界大戦後の国境変更であった。

1914年８月，第一次世界大戦の火蓋が切られ，ヨーロッパの勢力は，ドイツ，オーストリア＝ハンガリーの中欧同盟とイギリス，フランス，ロシアの三国協商に二分される。そのさいルーマニアの立ち位置は，トランシルヴァニア領有問題においてはオーストリア＝ハンガリーに対立し，ベッサラビア領有問題においてはロシアに対立するという，複雑なものであった。19世紀後半のハンガリーで強行されたマジャール化政策に反発して，トランシルヴァニアのルーマニア人は執拗な抵抗を繰り返し，それを支援するルーマニアの国内勢力のあいだでオーストリア＝ハンガリーに対する反感がつのっていたものの，開戦後，ルーマニアは中立を選択する。1914年10月に死去したカロル１世の後を継いだフェルディナンド１世も，中立政策を踏襲した。しかし，戦争が長引くにしたがい，国内では協商側に立って即時参戦を求める声が高まり，ついに政府は1916年８月17日，フランス，ロシア，イギリス，イタリアと同盟条約を交わし，８月末，トランシルヴァニアに侵攻した。

この時期ルーマニアが参戦を決意した理由のひとつに，ガリツィア戦線におけるロシアのブルシーロフ攻勢[5]を好機と見なしたことがあげられるが，ルーマニアの判断は甘かった。ルーマニア軍は，たちまちトランシルヴァニアから追われたばかりか，ドイツとオーストリア＝ハンガリーの同盟軍はワラキアに侵入，黒海岸のドブロジャからはドイツとブルガリアの同盟軍が押しよせ，12月６日，首都ブカレストは敵軍の手に落ちる。結局，ルーマニアはワラキア全土を占領され，最後まで自力で独立を回復することはできなかった。

その敗戦国ルーマニアを戦勝国に転じ，もとの領土の回復どころか，大幅な領土拡大をもたらしたのが，西部戦線でのドイツ軍の敗北と，1917年革命によるロシア帝国の崩壊である。1919年１月よりパリで開催された講和会議でルーマニアは，旧オーストリア＝ハンガリー領域から旧トランシルヴァニア公国領とその周辺のルーマニア人居住地域ならびにブコヴィナの領有を認められ，旧ロシア帝国領域からはベッサラビア領有を認められ，ここに大ルーマニアが誕生した。（**地図３参照**。）ルーマニアの国土は1914年に比べて一気に２倍以上に拡大し，同じく人口も777万1341人から約２倍の1466万9841人に増加した[6]。

在外ルーマニア人居住地域の取り込みは，しかし，ルーマニアの多民族国家化をもたらす。第一次世界大戦以前の旧王国領では８％以下であった少数

民族の割合は，戦後は30％近くに増加した。1930年の人口調査の結果は以下の通りである[7)]。

地域別人口構成

総人口	1805万7028人	
旧王国領	879万1254人	
	（ワラキア 635万7658人　モルドヴァ 234万3596人）	
トランシルヴァニア	554万8363人	
ブコヴィナ	85万3009人	
ベッサラビア	286万4402人	

民族別人口構成

ルーマニア人	1298万1324人	71.9％
ハンガリー人	142万5507人	7.9％
ドイツ人	74万5421人	4.1％
ユダヤ人	72万8115人	4.0％
ウクライナ人	59万4571人	3.3％
ロシア人	40万9150人	2.3％
ブルガリア人	36万6384人	2.0％
ジプシー	26万2501人	1.5％
その他	54万4055人	3.0％

⑵　ルーマニアのユダヤ人

第一次世界大戦前後のルーマニアで，ユダヤ人はいかなる存在だったのか。

まず注意すべきは，ルーマニアのユダヤ人口は，ルーマニア全土に遍在したわけではないことである。モルドヴァ，ワラキア両公国の統合が始まる1859年当時，両公国で実施された人口調査によれば，ユダヤ人口は約13万5000人（総人口の約３％）で，そのほとんどはモルドヴァに存在した[8)]。ワラキアで最もユダヤ人口が集中したブカレストでも，1860年当時で，その数はわずか5934人（総人口の約4.9％）にすぎない。ブカレストが統一ルーマニアの首都になると，首都の総人口は，1912年には34万1321人に増加し，ユダヤ人

口もまた4万4000人に激増する[9]。しかし，ルーマニア全体を見れば，ユダヤ人口がモルドヴァの，特に都市部に集中する状況に変わりはなかった。

1899年の人口調査によれば，ルーマニアのユダヤ人口は26万6652人で，ルーマニア最大の少数民族であったが，総人口に占める割合は約4.5%にすぎない[10]。しかし，ユダヤ人口の79.73%は都市部に住み，モルドヴァ最大の都市ヤシでは，ユダヤ人口は3万9441人で，街の人口の50.8%に達した。同じくモルドヴァの比較的大きな都市，ボトシャニでは1万6817人(51.8%)，ドロホイでは6804人(53.6%)，ファルティチェニでは5499人(57%)であり，これより小規模な町になると，ユダヤ人口が60%から65%に達するところも珍しくなかった。モルドヴァの都市部を見れば，ユダヤ人はきわめてめだつ存在だった[11]。

国民の多数民族が農民であるのに対し，少数民族のユダヤ人が都市部に集中し，商業，職人業において高い比率を示す傾向は，東中欧各国で共通に見られた現象である。ルーマニアも例外ではない。1904年の統計によれば，ルーマニアの職業構成において，ルーマニア人の84%以上が農民であるのに対し，ユダヤ人の場合，農業従事者は2.5%にすぎない。ユダヤ人の職業構成は，工業・手工業の従事者が42.5%，商業・金融業37.9%，自由業・専門職3.2%，その他13.7%と，ルーマニア全体とはきわだった相違を示していた。ルーマニアの商人においてユダヤ人が占める割合は，全体では21.1%であるが，ヤシでは75.3%，ボトシャニでは75.2%，ドロホイでは72.9%の多数を占める。また第一次世界大戦以前，自由業や専門職でユダヤ人に解放されていたのは医師のみであったが，ユダヤ人医師の占める割合はユダヤ人の人口比をはるかに上回り，38%に達した[12]。こうしたユダヤ人口の都市部への集中や，都市部で商業を独占し，また医師といった専門職に高比率で進出する状況は，19世紀末からようやく成長しはじめたルーマニア人の都市中間層や知識人，学生たちのあいだで反感を招く。

一方，都市部にかぎらず農村部でも，アレンダ制(農地経営請負制)がユダヤ人と農民のあいだに緊張関係を生んでいた。

第一次世界大戦以前のルーマニアは，6500人の大土地所有者が全耕地の半分を所有し，著しい土地所有の不平等が存在した国である。大土地所有者の

多くは，ブカレストやパリ等に住み，所有地の大部分を農地経営請負人に賃借した。請負人は，農地をさらに農民に賃借するか，土地を持たない農民を雇って耕作させたが，いずれの場合も，これら農民と請負人のあいだに，さらなる請負人が入ることも珍しくなかった。大土地所有者から大規模農地の経営を請け負った請負人は，農地を分割し，その経営を中小の請負人に賃借したからである。いうまでもなく，あいだに中小の経営請負人という中間搾取者が入れば入るほど，末端の農民からの収奪は苛酷なものとなる。農民と請負人の賃借契約あるいは労働契約は，農民にとってきわめて不利であった。

特にモルドヴァで農地経営請負業に集中したのがユダヤ人である。農民は，大土地所有者と複数の農地経営請負人による二重，三重の搾取に対して暴動を起こし，請負人を介さず，農民が直接土地を賃借する権利を求めた。モルドヴァ北部のボトシャニ県フラムンジ村で，1907年２月８日にユダヤ人が請け負う農地で発生した暴動は，モルドヴァ北部全域に広がり，さらにルーマニア全土に飛び火した。請負人が襲撃され，死者まで出たが，請負人がユダヤ人である場合，暴動はしばしば反ユダヤ的性格をおびた[13]。

このように少数ながらも特異な存在感を発揮するユダヤ人に対し，ルーマニア社会には強い警戒感があった。1866年７月の統一ルーマニアの憲法制定のさい，ルーマニア議会は，ユダヤ人をルーマニア人と完全に平等な国民とすることに強く抵抗する。モルドヴァ，ワラキアがロシア帝国の保護下におかれたさい，両公国に対して1831年に制定された基本法（レグルマン・オルガニック）は，ユダヤ人をルーマニアで市民権を持たない外国人と位置づけたが，1866年憲法第７条は，キリスト教徒の外国人にのみルーマニア国籍を取得する資格を認め，非キリスト教徒の外国人であるユダヤ人をその資格から排除した。これによってユダヤ人は，憲法がルーマニア国民に認めたさまざまな市民権からも自動的に排除され，ルーマニア統一以前と同様，所有権や営業の自由において著しく制限を受ける状況が継続した。

ルーマニアは自国の独立の国際的承認を求めたが，そのさい，こうしたユダヤ人の差別状況は，すでにユダヤ人解放を実現した西側諸国に問題視される。そのため1878年のベルリン条約は，独立承認の条件として，ユダヤ人など，ルーマニアの非キリスト教徒に対する法的平等の実現を要請した。これ

に反対してブカレストその他の都市で反ユダヤ・デモも発生するなか，ベルリン条約への対応を迫られたルーマニア政府は，1879年10月，問題の1866年憲法第７条を修正するものの，ほとんど実際的意味を持たない修正にとどまる[14]。ルーマニアは，ポーランドなどロシア帝国領であった地域とならび，ヨーロッパで最もユダヤ人解放が遅れた国のひとつであった。1903年に偽名で刊行された『ルーマニアとユダヤ人』と題する著書は，ユダヤ人に対し，悪意をこめて次のように述べる。

> 「ルーマニアにおいてユダヤ人は居留外人であり，将来的にも変わりはない。ユダヤ人は甘んじてこれに従わねばならない。彼らは招かれもしないのに，ルーマニア人の意思に反してこの国にやって来たのだ[15]。」

結局，ルーマニアのユダヤ人の国籍問題，市民権問題の解決は，第一次世界大戦後までずれこむ。ルーマニアは，1919年12月に連合国およびその同盟国とのあいだで少数民族保護条約を交わし，23年３月の議会で，大ルーマニアに居住するすべてのユダヤ人に対してルーマニア国籍を認めた。しかし，このときルーマニアのユダヤ人口は，第一次世界大戦以前の実に約３倍以上に膨らんでいた。1930年の統計により，大ルーマニアの新領土のユダヤ人口を示せば，ブコヴィナ９万3101人，ベッサラビア20万6958人，トランシルヴァニア19万3679人で，計49万3738人となる。これに対して旧王国領のユダヤ人口は26万3192人と，第一次世界大戦以前とそれほど変わっていない[16]。

この増大したユダヤ人を標的とし，1923年にヤシで結成されたのが，後の軍団運動の出発点となる民族キリスト教防衛連盟である[17]。中心人物は，ヤシ大学法学部の学生コルネリウ・コドレアヌと法学部で政治経済学講座を担当するアレクサンドル・C・クザであった。彼らは「キリスト・君主・民族・ルーマニア人のルーマニア」の標語に集約される民族主義的理念の実現を目標とし，そのためには「ユダヤ人問題の解決」が不可欠と主張した。具体的には，ユダヤ人の政治的権利の剥奪，軍隊・官吏からのユダヤ人排除，1914年８月１日以降に移住してきたユダヤ人の本国送還[18]，大学等におけるユダヤ人比率の制限導入などが掲げられた。モルドヴァ，ブコヴィナという，ユダヤ人口が集まる地域で誕生した軍団運動は，両大戦間期ルーマニアにおいて

組織を再編しながら驚異的な持続力を発揮し，1937年には党員27万2000人を擁して国内最大の大衆運動に成長した。そして，次章で述べるように，1940年９月にはついに政権中枢に入ることに成功する。

Ⅲ　ルーマニア人のルーマニア

⑴　アントネスク政権の成立

はじめに，ナチ・ドイツと同盟関係を結んだアントネスク政権成立の経緯を簡述しておきたい。

1927年，フェルディナンド１世が13年の統治後に死去したとき，彼の後を継いだのは，当時まだ６歳の孫ミハイである。フェルディナンドの長子で，ミハイの父カロルは，愛人問題を理由に王位継承を認められなかった。ところが，王位継承権放棄後，愛人とともに国外に去ったカロルが1930年になって突然帰国し，将校グループと農民党の支持をえて幼王を退け，みずからカロル２世として即位を宣言する。おりしも1929年の世界恐慌で経済が破綻したルーマニアでは，同時期の東欧各国と同様，反ユダヤ主義を掲げる極右の軍団が飛躍的に勢力を拡大しつつあった。政治的，経済的，社会的危機を乗り切るため，議会制を無視して独裁色を強める国王と，もはや国王のコントロールがきかない大衆運動へと成長した軍団との対決については，藤嶋亮氏の『国王カロル対大天使ミカエル軍団』(彩流社，2012年)に詳しい。カロル２世は，1938年２月10日のクーデタと３月30日の新憲法公布によって国王独裁体制を固め，11月には軍団のカリスマ的指導者コドレアヌを殺害させるなど，一旦は軍団運動の押さえ込みに成功したかに見えた。しかし，その国王の威信を完全に失墜させたのが第一次世界大戦後に獲得した新領土の喪失である。

前章で述べたように，ルーマニアはヴェルサイユ体制の「勝ち組」であり，拡大した領土の保全に関して頼みの綱はフランスであった。しかし，1939年３月のナチ・ドイツによるチェコスロヴァキア解体，ハンガリーによるカルパート・ウウライナの占領で自国の安全保障に脅威を感じたルーマニアは，やむなくドイツとの宥和をはかり，ドイツ側にきわめて有利な通商協定に調印する。同年９月の第二次世界大戦勃発では，なお中立を宣言するものの，

1940年6月，フランスがドイツに敗北すると，ルーマニアは全面的に親独路線へと舵を切り直した。目的のひとつは，ソ連によるルーマニアの東部国境修正要求に対してドイツの保護を求めることであったが，すでに開戦前，1939年8月の独ソ不可侵条約秘密議定書でソ連によるベッサラビア再併合が合意されていたことを考えれば，ルーマニアは，通商協定調印以来，茶番を演じさせられていたに等しい。1940年6月末，ソ連はベッサラビアに加え，独ソ不可侵条約秘密議定書では言及されなかった北ブコヴィナまで軍事占領した。このとき両地域からルーマニア人避難民がルーマニアへと流れ込む一方，モルドヴァ北部や南ブコヴィナのユダヤ人数千人が新ソ連領へと逃げ込んだが，後述するように，ホロコースト安全地帯であるはずのソ連が一転して地獄に変じたのは悲劇というよりほかない。ルーマニアの領土喪失はこれに留まらず，同年8月には，ドイツとイタリアの後ろ盾をえたブルガリアが南ドブロジャを，ハンガリーが北トランシルヴァニアを奪還する[1)]。(**地図4参照**。)もはやルーマニアにカロル2世の居場所はなかった。

ここで反国王派陣営のなかから急速に台頭したのが，軍人のI・アントネスクである。9月6日，カロル2世が退位して亡命すると，ただちに息子で皇太子のミハイがミハイ1世として即位し，I・アントネスクに国家の全権を付与した。そして，I・アントネスクが国家指導者としての地位を盤石なものとするため，政治的提携相手としたのが，カロル2世によって一旦は葬り去られたかに見えた軍団である。以前よりI・アントネスクは，イデオロギー的同調者として軍団と良好な関係にあり，また藤嶋氏によれば，カロル2世の独裁体制に対する批判勢力のうち，大衆的基盤と大衆動員力を持ち，さらに目下のルーマニアの外交的立場を考えれば，親枢軸路線を唱えてナチの好意を期待できる政治勢力は軍団以外に存在しなかったからである[2)]。I・アントネスクと軍団が提携したルーマニアは，みずからを「国民軍団国家」と称した。しかし，国民軍団国家において，軍団員が内務や警察等，治安機構の要職を握った結果，軍団の暴力を抑止する制度的枠組みはもはや機能せず，まさしく歯止めを失った暴力行為の暴走により，軍団はみずからの墓穴を掘ることになった。

軍団によって最初に標的とされたのはユダヤ人である。ユダヤ人はいたる

ところで暴行の恐怖にさらされたのみならず，軍団員によって勝手に農村部のユダヤ人の追放と彼らの土地や森林財産の没収が執行され，都市部ではユダヤ人の企業や商店が強奪される事件が多発した。また，ユダヤ人弁護士はほとんど仕事ができなくなるなど，厳格な職業制限も課せられた。しかし，企業や商店の強奪は，ユダヤ人ばかりか，軍団の意に添わないルーマニア人経営者にもおよび，市民の生命と財産の安全を脅かす無法行為の常態化は社会を不安に陥れる。さらに，カロル２世時代に軍団弾圧に関与した者たち64人の報復虐殺をはじめとして，軍団員による敵対者の容赦なき殺害はI・アントネスクの激怒をかった。この時点でナチにとっても軍団は，もはや利用価値の「賞味期限」に達しつつあった。軍団は，反議会主義，反共産主義，反ユダヤ主義，権威主義においてナチズムに思想的親近性をもつ勢力ではあるが，密かに対ソ戦を準備中であったヒトラーにとって，前線基地となるべきルーマニアの政治的・社会的混乱は望むところではない。1940年11月23日の三国同盟加盟後，I・アントネスクは年明けにヒトラーから不介入の保証をとりつけ，軍団排除に着手する。情勢の変化を嗅ぎつけた軍団は，１月21日早朝，武装蜂起に踏み切るが，翌22日の夜までにほぼ鎮圧され，軍団運動は最終的に活動の幕を閉じた[3)]。

だが，テロル集団としての軍団の切り捨てはもちろん，アントネスク政権における軍団イデオロギーの清算ではなく，それはナチが望んだことでもなかった。第II章第２節で述べたように，軍団は，第一次世界大戦後の領土拡大で必然的に多民族化したルーマニアで，とりわけユダヤ人を標的としつつ，ルーマニア人のルーマニアの実現を求めて誕生した。アントネスク政権は，ナチからの借り物ではない軍団の反ユダヤ主義とルーマニア民族浄化主義[4)]をイデオロギー的支柱とする政権である。軍団の蜂起後，1941年２月のルーマニアにはドイツから派遣されたドイツ軍兵士68万人がおり，ルーマニアはほとんどドイツ軍の占領下におかれたかのごとき様相を呈していた[5)]。しかし，アントネスク政権の反ユダヤ政策は，政権の意に反したナチの圧力によって導入されたものではない。

1941年３月７日の閣議でI・アントネスクは，ルーマニアの非ルーマニア人の存在に関して，次のように述べる。

「みなさん，わが国民は自己を浄化するために，均質[な国民]になるために，この災難を利用することができるということ，みなさんには，これを確信していただかなければなりません。われわれは，容赦はいたしません。私は，人間を念頭においているのではありません。ルーマニア国民の一般的利益を考えているのであり，それは，われらに，もはやこれまでのように寛容であってはならぬと命じています。この寛容さのためにわが住民は，われらにかくも多くの危害を加えたかくも大量の外国人に対して我慢の限界を越えるという事態に立ちいたったのです。[中略]もはや彼らに対し，いかなる譲歩をするつもりもありません。もはや同情心はもちません。というのも私には，ただルーマニア国民のことのみが悔やまれるからです。問題は，個別的にも全体的にも解決されねばなりません。相手がウクライナ人であろうと，ギリシア人その他であろうと，関係ありません。彼らはみな，ルーマニアの国土から出ていかなければならないのです[6)]。」

1941年6月22日に独ソ戦の火蓋が切られると，24日，ルーマニアはソ連に宣戦布告する。領土喪失を招いたカロル2世を追放し，国家指導者となったI・アントネスクにとって，ルーマニアの失地回復は至上命題であった。同じドイツの同盟国であるハンガリーとブルガリアに割譲させられた領土の奪還はさておき，独ソ戦においてルーマニアが期待したのは，ドイツの勝利と，その結果としてのブコヴィナ，ベッサラビアの再領有である。しかも，そのさい回復されるべき大ルーマニアは，ルーマニア人のルーマニア，すなわち民族的に浄化されたルーマニアでなければならなかった。1941年7月8日の閣議で，副首相兼外務大臣のミハイ・アントネスク(以下，イオン・アントネスクと区別し，M・アントネスクと表記する)は，対ソ戦は民族浄化のためのこの上ないチャンスであるとし，次のように述べる。

「私は，ベッサラビアとブコヴィナからすべてのユダヤ人を強制移住させることに対して賛意を表します。彼らは，国境の彼方に追放されねばなりません。同様に私は，ウクライナ人の強制移住にも賛成です。彼らは，もはやここに求めるべきものを持ちません。[中略]かつて，われらの歴史において，われらを ―― かくも包括的にしてラディカルに，またフリーハンドで ―― 民族的束縛から最終的に解放し，わが国民を民族的に刷新，浄化するのに，いま現在ほどの好機はありませんでした。[中略]この歴史的瞬間を利用し，ルーマニアの土地と民族をあらゆる汚物から清めようではありませんか。それらは，われらがわれらの主であることができなかった土地に，数世紀にわたってあふれ，広がったのです[7)]。」

いや，1941年９月３日にI・アントネスクが前線司令部からブカレストのM・アントネスクに送った電報によれば，独ソ戦の本質は，ユダヤ人との生死をかけた闘争でさえあった[8)]。そのさいI・アントネスクがめざすルーマニア人のルーマニアにおいて，第一次世界大戦までの領土である旧王国領と戦後獲得した新領土との区別はなされていない[9)]。しかし，イオンならびにミハイ・アントネスクの発言から明らかなように，独ソ戦に乗じつつ，ルーマニアの民族浄化の最優先地域とされたのが，ブコヴィナとベッサラビアである。戦後の戦犯裁判にいたるまで繰り返されたその理由は，1940年に両地域がソ連に併合されたさい，ユダヤ人が撤退するルーマニア軍に対して敵対行為を働き，ソ連によるルーマニア人の迫害に加担したという，事実としては一般化しがたい理由と，前線地帯からルーマニアに対する忠誠心に疑いのある者たちを排除するという戦略的理由に求められた[10)]。以後，ルーマニアのユダヤ人の運命は，失われた「自国」にして，取り戻すべき「自国」であるブコヴィナ，ベッサラビアのユダヤ人と，「自国」のユダヤ人，すなわちワラキア，モルドヴァ，南トランシルヴァニアのユダヤ人とでわかれることになる。

⑵　ヤシのポグロム

「自国」のユダヤ人，すなわちワラキア，モルドヴァ，南トランシルヴァニアのユダヤ人に対するアントネスク政権の反ユダヤ政策は，「はじめに」で述べたナチ・ドイツの同盟国と大きく異なるものではない。経済のルーマニア化というスローガンのもと，ユダヤ人は弁護士，医師等の専門職や企業経営から排除され，徴兵から除外される代替として軍税を課せられた。とりわけ独ソ戦中，1943年に課せられた総額40億レイの特別税は，職場や財産，住居等の剥奪で困窮するユダヤ人社会から最後の１銭まで搾り取る仕打ちとなる。また軍税のほか，18歳から55歳までの男性８万4042人が兵役がわりの無償労働者として登録された[11)]。彼らは，一部は彼らの居住地で通いの労働力として使用されたが，一部は建設現場等に併設された劣悪な労働キャンプに送られた。また一部は派遣労働大隊に組織され，遠方の鉄道建設現場等で酷使された。

ワラキア，モルドヴァ，南トランシルヴァニアにゲットーは設置されなかったものの，ユダヤ人住民の移動と集中も進められる。第II章第２節のユ

ダヤ人の分布で述べたように，ベッサラビア，ブコヴィナが失われた後，ルーマニアのユダヤ人口はソ連と新国境で接するモルドヴァに集中していた。独ソ戦前夜の1941年６月18日，I・アントネスクは利敵行為防止を理由に，村落および小さな町から州都ないし比較的大きな都市へのユダヤ人の強制疎開を命じる。これは，一面では国民軍団国家成立直後に軍団員が勝手に執行した農村部のユダヤ人追放の続行であり，疎開したユダヤ人の財産は国庫に没収された[12]。1941年７月31日までに強制疎開させられたユダヤ人は４万人にのぼり，これによって441の村落および小さな町からユダヤ人の姿が消えた[13]。他方でユダヤ人が送り込まれた都市のユダヤ人社会は，彼らを収容しきれず，倉庫や廃屋，シナゴーグ等が彼らの収容所になった。

ソ連国境に近く，モルドヴァで最大のユダヤ人口を持つ都市ヤシの1941年６月28／29日のポグロムは，この強制疎開措置の流れのなかで発生する。

イートンの研究[14]に拠りながら，いまなお詳細を特定できないポグロムの発生経緯をたどれば，６月22日の独ソ戦開戦後，ルーマニアは24日にソ連に宣戦布告したが，両国の国境でただちに戦闘が始まったわけではない。ルーマニア軍とともにブコヴィナ，ベッサラビア方面に向かうべきドイツ軍南部方面軍は，投入兵力に見合わず作戦地域が広大であったため，バルト地方に向かった北部方面軍や，ベラルーシに向かった中部方面軍に比べて進軍が遅れていた。しかし，６月25日，26日と，ソ連軍によるヤシ空爆で街の緊張は一気に高まった。そのなか，ソ連機に対してユダヤ人が合図を送り，空爆目標を教えているという噂が流れ始める。28日には，街に共産主義者であるユダヤ人の殺害を呼びかけるビラも張り出された。そして，ついに同日の午後，ルーマニア軍兵士やヤシに配置されたドイツ第11軍第30部隊のドイツ人兵士に一般市民も加わり，ユダヤ人に対する暴行が単発的に始まるが，それがポグロムへと移行するのは夜になってからだった。

21時30分頃，警察本部に対し，１機あるいは数機の飛行機から照明弾あるいはロケット弾が発射され，街のあちこちで共産主義者とユダヤ人による銃撃が発生しているという一報がもたらされる。実際にそのような銃撃があったのか，真偽は不明である。いずれにせよ，銃撃発生を理由にドイツ軍司令官が数千人のユダヤ人の逮捕と警察署への連行を命じ，報告を受けたI・アン

トネスクもまた,電話でヤシのルーマニア守備隊の司令官に対し,銃撃のあった地区の住民すべてを捕らえて有罪者を処刑するとともに，すべてのユダヤ人をヤシから強制退去させ，一旦，別の街に移した後，最終的にワラキアのトゥルグ・ジウのキャンプに送るよう指示した。

I・アントネスクもルーマニア軍も，ユダヤ人の忠誠心に強い不信感を抱いており，すでに独ソ戦開戦の前日にあたる６月21日にI・アントネスクは，軍からの要請もあり，ルーマニアとソ連の国境を流れるプルト川と，この川に並行してモルドヴァ中央部を流れるシレト川に挟まれた地域で，前線地帯に住む18歳から60歳までのユダヤ人健常者を即座にトゥルグ・ジウの収容所ないしその周辺の村に移送するよう命じていた。したがってI・アントネスクの28日夜の指示は，その命令の繰り返しと見ることもできるだろう。

こうしてユダヤ人狩りが始まった後，翌29日の午後１時頃までに警察署本部の中庭に集められたユダヤ人の数は，推定で3000人から5000人とされる。惨劇は，中庭のユダヤ人に向かって何者かが発砲したことから始まった。これを合図として，中断をはさみ，午後６時頃まで大量射殺が続いた。なぜ，このような事態になったのか。射殺のあいだ，何者が中庭のコントロールにあたっていたのか。これについて，残された同時代史料は内容的に食い違う。すなわち，当時のヤシの警察長官やルーマニア軍司令官による事件の調査報告書は，ユダヤ人の連行と射殺の主たる責任をドイツ軍に帰するが，他方で，ルーマニア諜報機関のトップとルーマニア軍の最高司令部ならびにルーマニアに配置されたドイツ軍司令部が事前に密接に連絡をとり合い，ポグロムの挑発と執行を了承していたことを暗示する同時代史料も存在し，後者の史料内容を裏付ける戦後の関係者による証言も存在する。実際，ポグロムに巻き込まれたユダヤ人の証言によれば，警察署への連行においても，中庭での射殺においても，ドイツ軍のみが主役というより，ドイツ兵とルーマニア兵の双方が目撃されていた。

しかし，中庭での射殺後の「死の列車」についていえば，疑問の余地なく責任は全面的にルーマニアにあった。中庭で生き残ったユダヤ人は，29日の夜，I・アントネスクが命じた強制疎開執行のために鉄道駅に連行され，用意された貨車に詰め込まれる。その後，40両編成の１台目は約2500人を乗せ，ヤ

シから500キロ離れた黒海沿岸の街カララーシに向かい，18両からなる２台目は約1900人を乗せ，ヤシから30キロ西方のポドゥ・イロワイエイ村に向かった。（写真１，２参照。）

ところが１台目の貨車は，カララーシまで軍司令部と内務大臣が矛盾する運行経路を指示したため，一旦，のろのろと進んだ経路を逆方向に引き返すなど，迷走に迷走を重ねる。目的地に着いたのは，実に１週間後の７月６日の午後であった。貨車にはもともと窓がない上，大きな通気口は脱走防止のために板でふさがれていた。炎暑で車内にこもる熱気にもかかわらず，水すら与えられなかったため，すでに警察署への連行や中庭で受けた暴行で負傷していたユダヤ人は次々に衰弱死する。貨車は，暑さで腐乱し始めた死体を途中駅で棄てながらの「死の列車」となり，1400人以上が死亡した。２台目の貨車もまた，一旦，出発した後，再びヤシに戻って新たな囚人を詰め込むなど，通常なら30分もかからない距離を８時間かけて進む。２台目の貨車の詰め込み方は，１台目にもましてひどく，目的地に到着したとき，1900人のうち約1200人が死亡していたが，多くは窒息死であったとされる。

イートンによれば，上記のように死の列車の犠牲者数が比較的明かであるのに対し，それに先立つヤシの街中や警察署本部でのポグロムでいったい何人のユダヤ人が殺害されたのか，不明である。同時代史料があげる犠牲者数や，同時代史料を用いた研究者の推定には大きな幅があり，犠牲者を500人とするもの，4000人から5000人とするもの，死の列車の犠牲者を含んで8000人とするもの，含まずに8000人とするもの，あるいはそれ以上の犠牲者数をあげる史料も存在するという。（写真３参照。）

ヤシのポグロムは，ほとんどの研究書でルーマニアにおけるホロコーストの始まりと位置づけられる。そのため本稿でもそれなりの紙幅をさいた。しかし，ヤシのポグロムは，ルーマニアの民族浄化政策の一部というより，すでに予定されていた「自国」のユダヤ人に対する強制疎開措置の流れのなかで発生したことを確認しておきたい。独ソ戦開戦直後に，たとえばドイツ軍に占領された東ガリツィアのリヴィウや，リトアニアのカウナスあるいはラトヴィアのリーガで執行されたポグロムは[15]，同地のユダヤ人社会絶滅の文字通りの始まりとなった。ポグロム後まもなく，街のユダヤ人はゲットーに隔

離され，最終的には絶滅収容所へと移送された。この点でヤシのポグロムは性格が異なる。カララーシに移送されたユダヤ人は８月末に解放され，ヤシに帰ることを許されている。ルーマニアの民族浄化政策の始動と位置づけられるべきは，ヤシではなく，ミュンヘン作戦の開始と同時に執行されたブコヴィナ，ベッサラビアのユダヤ人の殺害とトランスニストリアへの追放である。

Ⅳ　民族浄化政策の始動

⑴　ミュンヘン作戦

ミュンヘン作戦とは，ルーマニア・ドイツ同盟軍による北ブコヴィナ，ベッサラビア奪還作戦を示すルーマニア側のコードネームである。ブコヴィナ，ベッサラビアのユダヤ人の殺害と追放は，1941年７月２日のミュンヘン作戦開始と同時に始まり，７月26日の作戦終了後に本格化した。主たる執行者は，ルーマニアの憲兵隊と軍の兵士，とりわけプレトリアと呼ばれた軍の民政部門のメンバーあった。

ルーマニア第３軍が展開したブコヴィナで，７月３日に最初の犠牲者となったのは，南北ブコヴィナの境界に位置するシレト川沿いの町シレトのユダヤ人である。ルーマニア軍は，同日のうちにシレト川に沿って北へと攻め上り，チュデイ村のユダヤ人450人と，その北に位置するストロジネツのユダヤ人200人を射殺，翌４日には，現地のルーマニア人ならびにウクライナ人住民の協力のもと，ストロジネツを円形に囲むパンカ，ヨルダネシュツィその他の村でユダヤ人の殺害が執行された。村によっては，ユダヤ人口がほぼ消滅した。

さらに翌５日の夜，ストロジネツでのユダヤ人殺害を執行したルーマニア軍部隊が先遣隊としてブコヴィナの中心都市チェルナウツィ（ウクライナ語称チェルニウツィ，ドイツ語称チェルノヴィツ）に到達，次いで６日の朝，ルーマニア第３軍本隊とドイツ第11軍が街に入った。チェルナウツィに駐留したソ連軍は，すでに６月30日の夜に撤退していた。1930年当時のチェルナウツィのユダヤ人口は４万2932人（総人口の38％）であったが，1940年のソ連併合以後の周辺町村からの流入で，独ソ戦直前のユダヤ人口は７万人程度に

増加していたと推定される[1)]。ユダヤ人に対する最初の強奪，強姦，殺害は，５日夜にチェルナウツィ入りしたルーマニア人兵士により，気が向くまま，勝手に執行されるが，大量殺害が組織化されるのは，６日の夕方６時過ぎ，南部方面でドイツ軍に同行した特別行動隊Dの特殊コマンド10b本隊の到着後である[2)]。

７月７日から特殊コマンド10bの隊員ならびにルーマニア人の憲兵や兵士によって，ユダヤ人，共産主義者あるいは共産主義の同調者と見なされた者たちの拘束が開始され，８日，９日の両日で500人以上のユダヤ人の処刑が執行された[3)]。ブコヴィナ県とチェルナウツィ市それぞれのルーマニア人警察長官が連名で８月17日付けで作成した報告書によれば，チェルナウツィ占領の初期段階で殺害されたユダヤ人は2500人である[4)]。ほかに，ソ連から奪還されたチェルナウツィで市長に任命されたトライアン・ポポヴィチは，７月５日から７月末までに推定2000人のユダヤ人が殺害されたとするが，チェルナウツィのユダヤ人共同体によれば，その数は5000人にのぼり，両者の数字は大きく異なっている[5)]。

他方，ベッサラビアの中心都市キシナウ(ロシア語称キシニョフ)では，７月13日にソ連軍が撤退した後，16日にルーマニア第４軍の先遣隊が街に入り，翌17日の夜明け，ルーマニア第４軍の本隊とドイツ第11軍ならびに特殊コマンド11aが到着した。1930年のキシナウのユダヤ人口は４万1405人(総人口の36%)であったが，1930年代の経済発展による人口増加や，1940年のソ連併合以後の流入で，ドイツ・ルーマニア同盟軍による占領直前のユダヤ人口は６万から７万人であったと推定される。チェルナウツィと異なり，キシナウでは７月24日にゲットー設置の指示が下るが，ユダヤ人のゲットー収容が完了するまでに１万人が殺害されたとされる[6)]。

ブコヴィナ，ベッサラビアで，それぞれの中心都市を奪還した後，７月26日にルーマニア第４軍はドニエストル川に到達し，これをもってミュンヘン作戦は終了した。８月はじめには，オデッサを除き，ドニエストル川とブク川にはさまれたトランスニストリア[7)]もドイツ支配下に入る。オデッサは，1939年当時で人口約60万人(うち約20万人がユダヤ人)を擁し，ブカレストと同規模の都市であった。ソ連軍の抵抗で，オデッサ陥落には結局，８月なか

ばから10月16日まで約３ヶ月を要したが，ドイツとルーマニアはオデッサ陥落を待たず，８月19日にティラスポルで，ルーマニアがトランスニストリアに占領行政府をおくことで合意した。この合意は，８月30日，ティギナで交わされた協定で確定された[8)]。(地図５参照。)

ナチ・ドイツとルーマニアがトランスニストリアと命名した地域は，歴史上，一貫して大ルーマニアの領域外にあった。ルーマニアは，ブコヴィナ，ベッサラビアと同様，トランスニストリアをルーマニアの領土に組み入れることを望んでいたのかどうか。トランスニストリアのルーマニア併合に関してティギナ協定は何も言及しておらず，I・アントネスクの発言には，望んでいたとも，いなかったともとれる「ぶれ」が見られる。しかし，冷静に計算すれば，本国への併合は，利益より困難の方がまさるとの判断が働いたはずだ[9)]。1939年のソ連の人口調査によれば，トランスニストリアの人口は約300万人だが，そのほとんどはウクライナ人とロシア人で，ルーマニア人は約30万人にすぎない。さらにルーマニア人以外の少数民族として，ユダヤ人約33万1000人と，エカチェリーナ２世以来の積極的な外国人入植者誘致政策の結果として，ドイツ人約12万5000人が居住していた[10)]。トランスニストリアは，ルーマニアの民族浄化政策がほとんど執行不可能な地域であった。

1939年９月の第二次世界大戦勃発後，またたくまにポーランドを占領したドイツは，占領地を大きく東西に二分し，ドイツと国境を接する西部のダンツィヒ・西プロイセン，ヴァルテラント，東オーバーシュレージエンはドイツ本国に併合したが，東部の総督府はドイツの植民地と位置づけ，西部の本国併合地にいたユダヤ人とポーランド人を総督府に追放した。ルーマニアにとって，ブコヴィナ，ベッサラビアとトランスニストリアの関係は，ブコヴィナ，ベッサラビアが両大戦間期ルーマニアの領土であったことを別にすれば，1939年ドイツの本国併合地と総督府の関係に類似する。事実，トランスニストリアは，ブコヴィナ，ベッサラビアのユダヤ人の追放地となるのだが，次章で述べるようにルーマニアは，トランスニストリアのユダヤ人の管理に関してまったく何の対策も立てていなかった。ルーマニアにとって，無策が無策のままですむ最善の方策は，ユダヤ人をトランスニストリアに留めおかず，一刻でも早くブク川東方のドイツ占領地へと厄介払いすることであ

る。しかし，この危険に対してドイツは，ティギナ協定第７条で，次のように釘をさすのを忘れなかった。

「ユダヤ人のブク川対岸への移送は，現時点では不可能である。したがって，作戦が終了し，彼らの東方への移送が可能となるまで，彼らは労働キャンプに集め，さまざまな労働に使用されるのでなければならない[11]。」

注

第Ⅱ章

1）Adam Wandruszka u. Peter Urbanitsch （Hg.）, *Die Habsburgermonarchie*, Bd. 3, Wien 1980, 1. Tl., Tabelle 1 und 2. Tl., S. 882.

2）Muzeul Naţional de Istorie a României, Institutul Cultural Român, *Basarabia 1812-1947,* Bucreşti 2012, p. 13.

3）ibid., p. 22. Irina Livezeanu, *Cultural Politics in Greater Romania,* Ithaca/London 1995, p. 90.

4）1683年のオスマン帝国による第２次ウィーン包囲失敗後，キリスト教ヨーロッパ諸国は攻勢に転じ，オスマン帝国は勢力後退を余儀なくされる。1699年にオスマン帝国とヨーロッパ諸国のあいだで交わされたカルロヴィツ講和条約で，オスマン帝国は，旧ハンガリー王国領のハプスブルク家への復帰と，オスマン帝国の宗主権下にあったトランシルヴァニア公国に対するハプスブルク家の支配を承認した。1867年のオーストリア＝ハンガリー二重君主国体制成立後，トランシルヴァニアはハンガリー王国に編入される。1910年の調査によれば，1919年にルーマニアに割譲される旧トランシルヴァニア公国領およびその周辺地域のマラムレシュ，サトゥ・マーレ，ビホル，南バナートを合わせた地域の総人口は526万3602人であり，民族別構成は，ルーマニア人53.8%，ハンガリー人31.6%，ドイツ人10.7%，ユダヤ人3.5%であった。（Livezeanu, op. cit., p. 135.）

5）1914年８月に第一次世界大戦が勃発した後，オーストリアのガリツィア，ブコヴィナに攻め込んだロシア軍は，同年末までに両地域のほぼ全域を掌握した。しかし，1915年９月末には，ドイツとオーストリア＝ハンガリーの同盟軍によって，もとのオーストリアとロシアの国境線まで押し戻される。その後ロシア軍は，1916年６月４日からアレクセイ・ブルシーロフ将軍指揮下でガリツィアに再侵攻したものの，攻勢は長くは続かず，10月17日に終了した。

6）Livezeanu, op. cit., p. 8.

7）ibid., pp. 9-10. Jean Ancel, *The History of the Holocaust in Romania*, Jerusalem 2011, p.

536, Table 13.

８）Ancel, op. cit., p. 8, Table 1. モルドヴァは，アシュケナージ系ユダヤ人が稠密に居住する地域の南の境界にあたる。

９）*Encyclopaedia Judaica,* 2 nd ed., Fred Skolnik editor in chief, Detroit etc. 2007, Vol. 4, p. 239.

10）Ancel, op. cit., p. 8, Table 1.

11）*Encyclopaedia Judaica,* 2 nd ed., Vol. 17, p. 384.

12）ibid.

13）Cf. I. C. Butnaru, *The Silent Holocaust. Romania and its Jews,* Westport etc. 1992, pp. 27-28.

14）ここで，ルーマニアのユダヤ人の国籍問題についてまとめておきたい。オスマン帝国時代のモルドヴァ，ワラキアのユダヤ人は，「この土地で生まれ育った者」と「外国の臣民である者」の二つのカテゴリーにわけられたが，1831年の基本法（レグルマン・オルガニック）により，前者の地位が大きく変わる。1828年のロシア・トルコ戦争に勝利した後，翌年のアドリアノープル条約でロシアは，宗主権をオスマン帝国に残したまま，モルドヴァ，ワラキアを自国の保護国とした。そのさいロシア総領事の監督下で起草され，1831年，ワラキア，モルドヴァの議会で承認された基本法は，ユダヤ人については時代逆行的な規定を含み，上記の二つのカテゴリーを排してすべてのユダヤ人を外国人と同等の扱いにし，ユダヤ人の経済活動にさまざまな制限を課した。この規定が1866年の憲法制定時まで生き続け，憲法第７条によって差別状態が継続されたことは本文で述べたとおりである。

　1878年のベルリン条約の要請を踏まえた79年10月の憲法第７条の改正でも，ルーマニア全土に居住するユダヤ人の国籍に関して，無条件の一括付与は認められなかった。改正は，他国籍を持たない外国人は，個人単位の帰化申請にもとづき，国会によって帰化が承認される，とするにとどめた。ベルリン条約の参加国はこの改正で満足し，1880年にイギリス，フランス，ドイツがルーマニア独立を正式に承認したが，改正は，実際にはほとんど意味をもたなかった。第一次世界大戦終了まで，この個人を単位とする制度で帰化申請が認められたのは，わずか2000人程度であった。

　ようやく1919年の少数民族保護条約は，「すべてのルーマニア市民は法の下に平等であり，人種，言語または宗教の違いにかかわらず，同一の市民的および政治的権利を享有する」（第８条）とし，ユダヤ人に関しては，「他の国籍を有しないルーマニアの全領土に居住するユダヤ人に対して，いかなる手続きもなしに，ルーマニア国籍を付与することを義務づける」（第７条）との特別条項をもうけた。以上について詳しくは Butnaru, op. cit., pp. 8 -26.

15）（Radu Rosetti）, Verax（pseudonym）, *Romania and the Jews,* English ed., Bucharest 1904, p. 49, in： Butnaru, op. cit., p. 24.

16）Ancel, op. cit., p. 536, Table 13.

17）民族キリスト教防衛同盟に始まる運動の組織の名称は，1927年から30年の「大天使ミカエル軍団」，30年から33年の「鉄衛団」，35年から38年の「すべてを祖国のために」，40年から41年の「軍団運動」と変遷し，これらの名称は並行して用いられもした。本稿では藤嶋氏にならい，軍団あるいは軍団運動という名称を用いる。（藤嶋亮『国王カロル対大天使ミカエル軍団 ―― ルーマニアの政治宗教と政治暴力』彩流社，2012年，8ページ。）

18）具体的には，ロシア革命によって流入した革命難民をさす。

第Ⅲ章

1）ハンガリーは，第一次世界大戦後にルーマニア領となったトランシルヴァニアの返還を要求し，両国の直接交渉は1940年８月16日に始まったが，決着しなかった。そのためヒトラーは争いをドイツ，イタリアの裁定に委ねることを求め，両国代表をウィーンに招集する。その結果，８月30日に北トランシルヴァニアのハンガリーへの割譲が決定された（第２次ウィーン裁定）。これによってルーマニア軍は北トランシルヴァニアから撤退し，かわってハンガリー軍が進駐したが，このとき北トランシルヴァニアで人口の約半数を占めるルーマニア人の一部が難民化し，ルーマニアに残された南トランシルヴァニアに流入した。

2）藤嶋，前掲書，337ページ。

3）以上について，藤嶋，同書，341ページ以下を参照。蜂起のあいだブカレストでは，軍団員により凄惨なポグロムが執行された。ユダヤ人の多数が集まり住む地区を中心に，彼らの家や店，ユダヤ人コミュニティの施設やシナゴーグが略奪，破壊され，これには軍団員のほか，一般市民も加わっていたという。また軍団員は，老若男女を問わず無差別にユダヤ人を捕らえ，軍団関連組織の施設や軍団が握っていた警察署の建物に連行して身ぐるみ剥ぎ取り，拷問のすえ，殺害した。ポグロムでの死者は125人にのぼる。ブカレストの市の食肉処理場では，肉吊り用フックに吊された10体以上のユダヤ人の死体が発見されたが，腹を裂かれた死体には抜き出された腸がネクタイのようにまかれ，「清浄肉（コシェル）」というラベルが貼られていた。清浄肉とは，ユダヤ教の規定に従って屠殺処理された肉を意味する。彼らは生きたままフックに吊され，腹を裂かれたという証言も存在する。Cf. Ancel, op. cit., p. 157. Radu Ioanid, The Holocaust in Romania. The Destruction of Jews and Gypsies Under the Antonescu Regime, 1940－1944, Chicago 2000, p. 57.

4）ただしルーマニアでは，民族浄化（エスニック・クレンジング）ではなく，「土地の浄化」といわれた。

5）Ancel, op. cit., p. 204.

6）Viorel Achim, Die Deportation der Juden nach Transnistrien im Kontext der Bevölkerungspolitik der Antonescu-Regierung, in: Wolfgang Benz u. Brigitte Mihok（Hg.）, *Holocaust an der Peripherie. Judenpolitik und Judenmord in Rumänien und Transnistrien 1940-1944*,

Berlin 2009, S. 154.［　］内は引用者による補足。以下，同様。

7）Jean Ancel, *Transnistria, 1941-1942. The Romanian Mass Murder Campaigns,* Tel Aviv 2003, Vol. 2, Document 3, pp. 3-6. *Die Verfolgung und Ermordung der europäischen Juden durch das nationalsozialistische Deutschland 1933-1945*, Bd. 7, Bert Hoppe und Hildrun Glass（Hg.）, Sowjetunion mit annektierten Gebieten I, München 2011（以下, VEJ, Bd. 7 と記す）, Dokument 284, S. 753-760.

第Ⅳ章第１節で述べるが，独ソ戦参戦後，1941年７月はじめに奪還した北ブコヴィナで，ルーマニア兵は，ユダヤ人のみならず，ウクライナ人その他も迫害の対象とした。特別行動隊D（第Ⅳ章第１節および第Ⅳ章の注２）を参照）の1941年７月29日から８月14日までをカバーする「活動ならびに状況報告」には，次のように記されている。

「ルーマニア人は相変わらず，あらゆる少数民族，とりわけ数の上で強力な集団であるウクライナ人を無慈悲に抑圧している。ルーマニア人は，ウクライナ人問題があくまでもルーマニアの意向どおりに解決されなければ，最終的に北ブコヴィナを喪失するのではないかと恐れている。

『ウクライナ人はすべてボリシェヴィキ』という政治的嫌疑のもとで，残酷な迫害が開始され，大規模な逮捕と銃殺が執行された。」（Peter Klein（Hg.）, *Die Einsatzgruppen in der besetzten Sowjetunion 1941/42. Die Tätigkeits-und Lageberichte des Chefs der Sicherheitspolizei und des SD,* Berlin 1997, S. 140.）

これに反発してウクライナ人住民のあいだでは，ルーマニア支配に対して武装抵抗を組織する動きが見られたが，こうしたルーマニア人とウクライナ人の対立は，ナチ・ドイツにとってきわめて望ましくない事態であった。ガリツィア，ブコヴィナは，ウクライナのソ連離脱と独立をめざすウクライナ民族主義者組織（略称OUN）の活動地域であり，独ソ戦においてドイツはOUNおよび現地のウクライナ人を親ドイツ勢力と見なしていたからである。

8）VEJ, Bd. 7, Dokument 295, S. 777-778.

9）ルーマニア全土の民族浄化をめざす「ビッグ・プラン」の存在については，Ancel, *The History of the Holocaust in Romania*, p. 457以下を見よ。

10）確かにソ連は国家として反ユダヤ主義を否認しており，それゆえ，特に若いユダヤ人のあいだには，ソ連統治にルーマニアの反ユダヤ政策からの解放と社会的地位上昇の機会を見出した者たちもいた。しかし，経済の社会主義化によって深刻な打撃を受けたのもユダヤ人である。第Ⅱ章第２節で述べたように，ユダヤ人の職業構成は商工業に偏るが，ブルジョア，プチ・ブルジョアと見なされたユダヤ人経営者や自営業者は，生計の途を剥奪された。思想・文化においても，シオニズムは弾圧の対象となり，敬虔なユダヤ教徒にとって，無神論のソ連で信仰の実践は不可能となった。

11）International Commission on the Holocaust in Romania, *Final Report,* Bucureşti 2005, p.

118.

12）*Final Report*, p. 119.

13）*Final Report*, p. 120.

14）Henry Eaton, *The Origins and Onset of the Romanian Holocaust*, Detroit 2013, pp. 81-147.

15）リトアニアについては，拙稿「自国史の検証 —— リトアニアにおけるホロコーストの記憶をめぐって」（野村真理・弁納才一編『地域統合と人的移動 —— ヨーロッパと東アジアの歴史・現状・展望』御茶の水書房，2006年，所収）を参照。ラトヴィアについては，拙稿「1941年リーガのユダヤ人とラトヴィア人 —— ラトヴィア人のホロコースト協力をめぐって」（前編・後編）（『金沢大学経済論集』第30巻第1号（2009年）・第2号（2010年）所収）を参照。

第Ⅳ章

1）Ancel, *The History of the Holocaust in Romania,* p. 270.

2）オットー・オーレンドルフ指揮下の特別行動隊（Einsatzgruppe）Dは，特殊コマンド（Sonderkommando，以下Sk）10a, Sk10b, Sk11a, Sk11bおよび出動コマンド（Einsatzkommando，以下 Ek）12によって構成される。独ソ戦の初期段階では，SkとEkの区別は曖昧で，本文中の「特殊コマンド10b」は，同時代史料ではしばしばEk10bと記されるが，Sk10bが正確である。Vgl. VEJ, Bd.7, S.760, Anm. 2.

3）VEJ, Bd. 7, Dokument 285, S. 760－761.

4）VEJ, Bd. 7, Dokument 292, S. 772.

5）Ancel, *The History of the Holocaust in Romania*, p. 273.

6）Ancel, ibid., p. 258. *Encyclopaedia Judaica*, 2nd ed., Vol. 12, p. 199.

7）トランスニストリアは，ドニエストル川とブク川にはさまれ，モヒリウ・ポジリシキ，シャルホロド，バル，ジュメリンカあたりを北西の境界とする地域に対して，ナチ・ドイツとルーマニアが与えた地域名である。

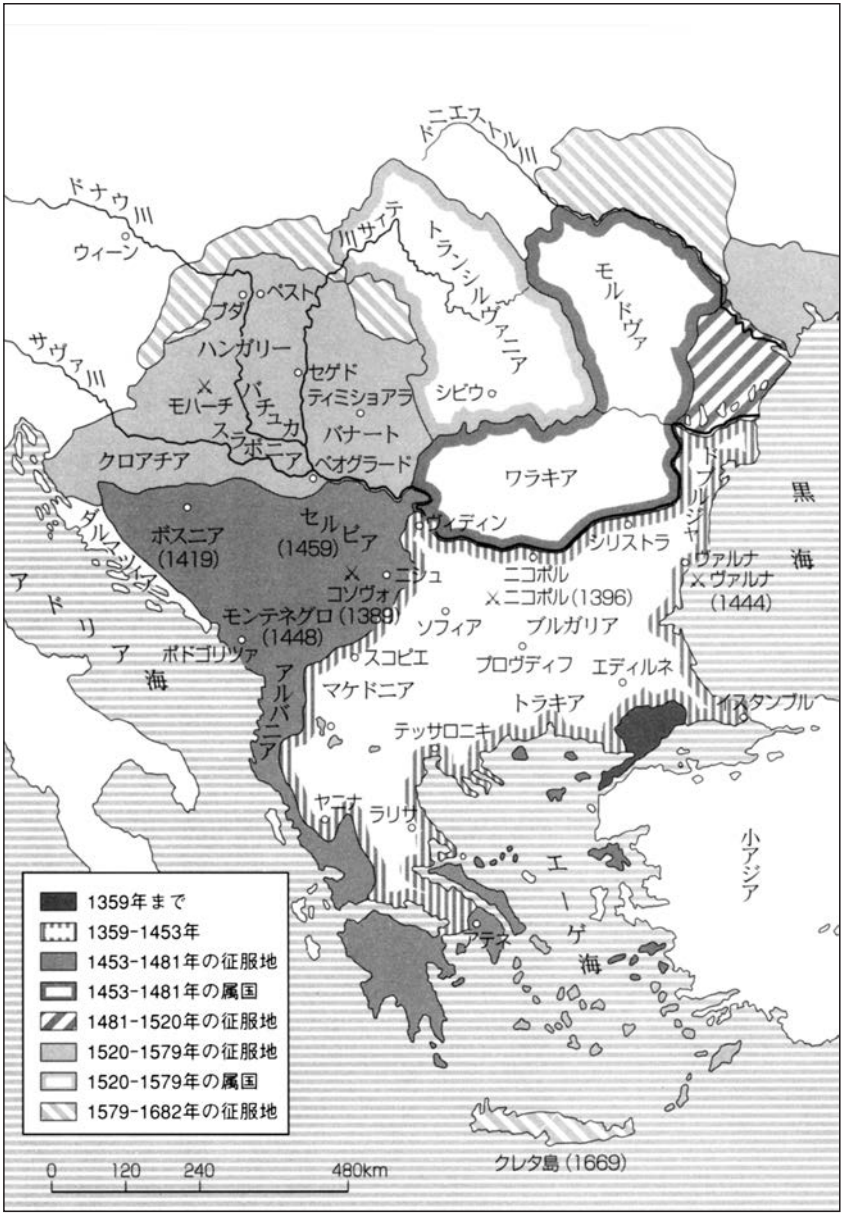
8）正式名称は，「ドニエストル川，ブク川およびブク・ドニエプル川間の領域における治安，行政，経済開発に関する合意」。ルーマニア語による本文はAncel, *Transnistria,* Vol. 2, Document 24, pp. 41－42.

9）Ottmar Traşcă and Dennis Deletant（ed.）, *The Third Reich and the Holocaust in Romania, 1940-1944. Documents from the German Archives,* Bucureşti 2007, p. 31.

10）Ancel, *The History of the Holocaust in Romania*, p. 315. トランスニストリアのドイツ人の分布については，同書380ページを参照。

11）Ancel, *Transnistria,* Vol. 2, Document 24, p. 42.

地図1　オスマン帝国の拡大

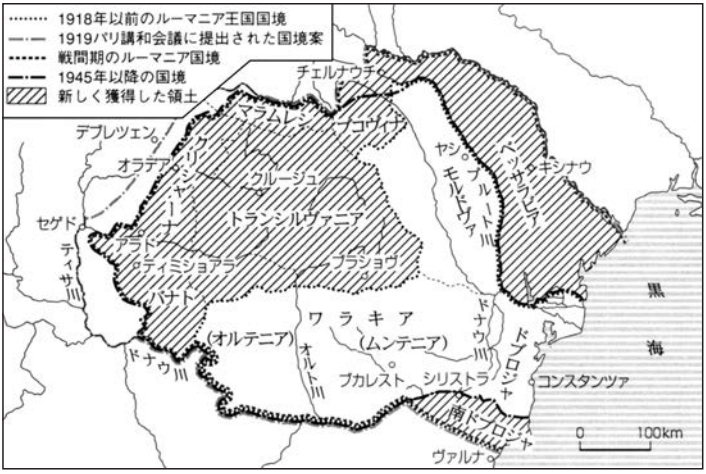


(柴宜弘(編)『バルカン史』山川出版社，1998年，124ページ。)

地図2　ルーマニアの独立

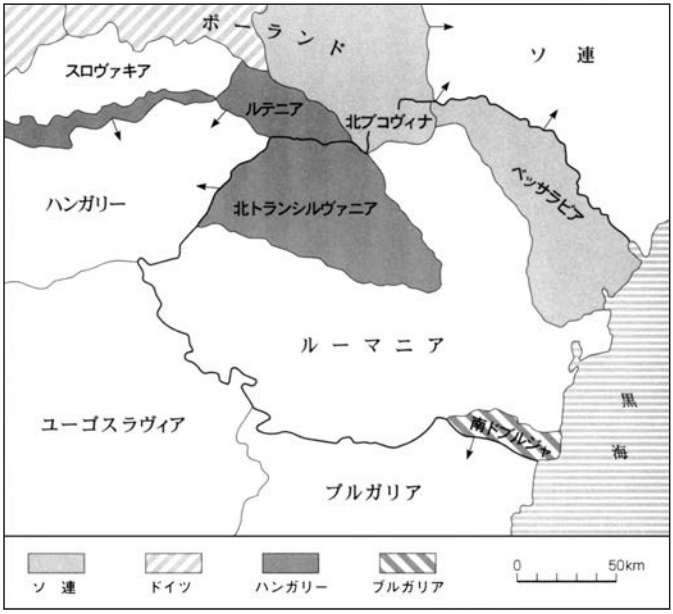
(柴(編)，前掲書，201ページ。)

地図３　大ルーマニアの誕生



（柴（編），前掲書，264ページ。）

地図４　ルーマニアの領土喪失



（柴（編），前掲書，301ページ。）

地図５　トランスニストリアとベッサラビア

（*Die Verfolgung und Ermordung der europäischen Juden durch das nationalsozialistische Deutschland 1933-1945,* Bd. 7, Bert Hoppe und Hildrun Glass（Hg.）, Sowjetunion mit annektierten Gebieten I, München 2011.）

写真１　1941年６月ポグロムでユダヤ人が連行されたヤシ鉄道駅

（2015年９月10日　筆者撮影）

写真２　ヤシ鉄道駅正面外壁につけられた1941年６月ポグロムの記念版

（2015年９月10日　筆者撮影）

写真３　ヤシ大シナゴーグの脇に建てられた1941年６月ポグロムの記念碑。記念碑には，犠牲者数は１万3000人以上と記されている。

（2015年９月10日　筆者撮影）